



Title	藤原頼長自邸講書考
Author(s)	仁木, 夏実
Citation	語文, 84-85, p. 53-65
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69057
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

藤原頼長自邸講書考

仁 木 夏 実

はじめに

藤原頼長（一一二〇～一一五六）の日記『台記』^①は、平安時代後期を代表する公家日記として知られる。保元の乱直前の政治状況、わけでも撰関家内部の様子が赤裸々に語られるほか、宮中の恒例行事などの記述は詳細に及び、彼の言動の典拠、参考とした故実などが多く載せられており、当時の貴族文化を知る上でもまた一級の資料である。なかでも、頼長が生涯強い関心を持っていた経史の学については記事も多く、『台記』を当時の一般的な公卿の日記とは一線を画するものとしている。

そうした経史の学に関する記事のなかに、彼が定期的に自邸で開催した学習会に関するものがある。近しい儒者を招き、孔子画像の前で経書の学習をしたこの会合は、康治二年（一一四三）七月二十二日から久寿二年（一一五五）十月二十六日まで、記録に残るだけでも七十数回の開催を数え、頼長の経学に対する情熱を

示す適例として知られている。しかし、その反面、頼長の経学修学についてはその特殊性が強調されることが多く、この学習会についても本格的な研究が行われてきたとは言い難い。本稿は大学寮における孔子礼拝儀式、積奠との比較を中心に、当該期学芸の中におけるこの行事の位置づけを試みるものである。

一

『台記』康治二年九月の記事の末尾には保延二年（一一三六）以降約七年間に頼長が学習した書の目録が載せられている。以降久安四年（一一四八）までの日記にも年末にその年学習した書が挙げられているが、それは「経家」、「史家」、「雑家」の三部門に分けられ、「雑家」に『文選』や「新楽府」などが文学作品も含まれているものの、殆どは『論語』などの経書と『史記』を始めとする史書で占められており、頼長の興味が奈辺にあったかを物語っている。「予聊か心を漢家の経史に遊ばしむ」（十二月三十日

条」とこの年の歳暮に述べていることはそのことを裏付けよう。

それらの書を頼長はいかに読み、学んでいたのであろうか。当時の高位貴族の常として、大学に学ぶということはなかったが、自家の家司をはじめとする親しい篤学の士たちから教授を受けていたのであろう。『台記』には、「余の師」として博士家である藤原式家の令明の他、藤原成佐、源俊通、中原師元らの名が挙げられている。また、『漢書』を源師頼に学んだことが、『今鏡』や『古今著聞集』に見える。

このような個人教授を高位の貴族が受けることは珍しいことではない。近くは、頼長の祖父師通と大江匡房の関係などが想起される。しかし、頼長の学習はそこに留まることはなかった。やがて彼は師につくことなく、側近の儒者たちとともに経書やその注疏類を読み始める。諸本を読み合わせて本文を校合し、見出しを付け、さらには重要な部分を抜き出して抄本を作るという念の入った作業を『礼記正義』・『儀礼疏』・『春秋』三伝などいくつもの書について行っている。文学・史学を学ぶ紀伝道が大学の他道を押さえて圧倒的な優位を誇り、「好文の卿相」といえば詩文に堪能であることを意味するこの時代にあつて、経史の学に対するこのような熱意は、確かに異例に属することに違いない。

その中で康治二年七月二十二日に始められたのが、毎庚子の日に自邸に孔子及びその弟子である顔回の画像（影）を懸け、その前で行われた学習会である。さらに天養元年（一一四四）には、それに加えて孔子の誕生日とされる八月二十一日に、経書の講論

や堅義などの行事が始められた。

紙幅の関係から、これらの一つ一つについて史料に即して具体的な次第を追うことは出来ないが、最も詳しい記述を持ち、また、その後の規範となったと考えられる康治二年七月二十二日の記事を挙げて、その概要を整理しておこう。

二十二日、丁丑、陰晴定まらず、雨時々降る。今日文宣王の影前において春秋左氏伝を講論す（密々の儀なり）。兼日曆博士憲榮をして日時を勘ぜしむ。是より後毎度子の日（孔子の生日なり。随ひて亦余の本命日に當る）、此の礼有るべし。初度に依り吉日を用ゐる（祀に丁日を用ゐるは丁寧の儀なり）。其の儀、寝殿西北の廊の母屋南間東一間の北障子に、a 文宣王の影を懸け（南面す、大学の儀に依る）、其の前に膳を弁備す（魚有り）。南辺に円座を敷きて講經の坐と爲し、其の南に高麗一帖を敷きて余の坐と爲し、東第三間、二行に畳を敷きて文人及び問者の坐と爲す。余、今日服者及び月水の女に逢はず、身、女を犯さず。但し、魚・韭・蒜等は憚らず。僧尼を憚らず。但し、今日先に賀茂栲有り（毎月恒例の事なり）、及び僧尼に逢はず。日昏れて浴す（沐は無し）。戌の刻、束帯し（剣は帯びず）、先に賀茂栲す（賀茂栲無しといへども浴有るべし）b 次いで坐上において先聖を拝す（二度）。了りて東の傍らに一両歩行きて先師を拝す（二度）。了りて余の命に依り、文人八人（講師・問者此の内に在り）、坐に就く（皆布衣・烏帽、東上に対座す）。c 次いで文章得

業生藤原成佐へ全經大義に通ず、左伝卷第一を持ちて、進みて坐に就き經を講ず。其の辞義絶妙、言ふ得べからず。衆人耳を側て歎美す。經を講ずること一時余り、了りてd前山城守源実長朝臣問を請ふへ一事を問ふことを請ふ。釈奠并びに同内論議皆一事を問ふ、仍て是又一事を問ふ。莊公二十二年經、夏五日の疑なり、三重なりへ二重にして了るを、余の命に依り重ねて之を難す。了りて前能登權守藤孝能朝臣、問を請ふこと先の如し。但し二重なり。襄三十年伝、亥字六身无きの疑なり。孝能重ねて少難残る。余の命に依りて暫く講師と相論す。此の両問者、位次に依りて文人の坐に在り、列坐せず。e事了りて講師退きて坐に復す。次いで文台を置くへ硯の蓋なり。f文人下臈より詩を書き了んぬ。g散位藤遠明朝臣坐に就きへ始め講經の人の坐なりへ、之を講ずること常の如し。下官講師為り。文宣王を以て主と為すの故なり。講了りて各坐に復す。

h講師・問者に禄を給ふ、
講師扇六・筆十・墨八へ各檀紙裏を以て之を扇上に置く、其の扇六枚の内なりへ、問者各扇二・筆五・墨三、
事了りて、講師・問者問答を書くへ其の書異裁へ、厨子に納め後鑒に備ふ、
詩書の様、
孟秋文宣王の影前に陪し聴講す
左伝一首へ此の行始めの行と同じ長さに之を書く、江家の説

なり、余春宮大夫の弟子なるが故に、仍て江家の説を用ゐる、自余は然らず、

内大臣正二位藤原朝臣頼長

已下准じて知るべし、

次第

左伝 公羊 穀梁 礼記 周礼 儀礼 詩

書 周易 論語 孝經 へ老莊を除くへ

きわめて簡略にこの行事の次第をまとめるならば、次のようになるう。

a 孔子(文宣王・先聖)・顔回(先師)の影を懸け、膳と当日講じる經を置く

b 影を拝した後、文人が席に就く

c 講師が座に就き、經を講じる

d 問者が請問し、講師と相論する

e 講師が座を退いた後、文台を据える

f 文人、下臈より詩を置く

g 講師、座に就き詩を講じる

h 講師・問者に禄を与える

生誕日である八月二十一日に行われる行事においても、この庚子の行事に加えて堅義と呼ばれる一種の試験を行ったり、講論の規模を拡大し、数日間に亘って行ったりしており、經書に関する知識を競い合うという基本的な姿勢は変わらない。本稿では、これらの行事を総称して仮に頼長自邸講書と呼ぶこととする。

文の場でもあった。

二

頼長の儒学研究にはやくから研究があるが、講書については、⁽³⁾概ね、大学寮における孔子礼拝儀式である釈奠、あるいは釈奠における講論に学んで、私的に行われたもので、經史学習のために仏教の法会における作法を利用する面があるという理解が広く受け継がれているようである。

後者の指摘から検討してゆこう。確かに、この講書には形式的に仏教的に学んだと思われる要素を数多く見出すことが出来る。

既に康治二年、講書の作法について「問答僧に異ならず、但し声を引かず」(十一月十八日条)と述べられており、僧侶の論議が当初から意識されていたことが明らかとなるが、久安年間に入ってから、講書にしばしば覺晴ら興福寺僧を招き、論議の作法について教えを請うている。

周易を講ず、：(中略)：、學晴僧都來たりて、問答を聞きて云はく、僧の作法に異ならずと。

(久安二年(一一四六)八月三日条)
覺晴僧都を招き、堅義の作法を問ふ。

(同年八月十九日条)
「僧侶の作法に異なら」ない問答では、問いを投げかける問者が表白を行った。久安二年六月二日条には頼長の表白の一節が引かれている。

引用した康治二年七月二十二日の干支は丁丑であった。これは初度ということで、曆博士賀茂憲采に特別に勘申させた日時であり、次回以後は庚子の日に行うことが明言されている。それは孔子の生誕日の干支であり、また、頼長の本命日であるからというすでに故人となった人物にちなんだ行事が、生誕日に行われる例はきわめて稀少と言えるのではないだろうか。管見の限りでも、灌仏会くらいしか見当たらない。反対にその命日を用いるものは、仏教の祖師供養をはじめとする追善仏事など数多い。命日に比べ、生誕日が知られることが稀であるといった事情もあるうが、庚子の講書にしろ、八月二十一日の講書にしろ、生誕日にちなんだ日に行われるという点は、この行事の大きな特色であろう。おそろく何らかの根拠があると思われるが、未詳である。

加えてここで注意しておきたいのは、この行事ではほぼ毎回作詩が行われていたということである。さきに引用した康治二年七月二十二日条でも「詩書の様」として端作、すなわち詩題と作者表記の様式が示されているが、以後も、作文(詩の制作)が行われなかった時(頼長近親の不例や服喪期間内など)には「無詩」や「停詩宴」といった記述が見られ、これは裏返せば、それ以外の時には明記されずとも作文が行われていたということになるろう。『台記』久安三年(一一四七)八月二十九日条には、同二十一日から連日行われた『儀礼』講書の竟宴について、詳細な記事があり、頼長の七言律詩一首(後掲)が残る。現存する詩はこれのみようであるが、頼長邸講書は、經書修学の間であると同時に作

余二重の難の後、表白す。其の詞に云はく、

講匠は答ふるに、累代の儒為り、既に九經の説を究習す。

問者は早く三吏の任に居り、未だ一篇の文を見る暇あらず。唯だ淺疑を出して、深旨を承らんと欲すのみ。敢へて疑を閉ざすに非ず、講匠の路を閉塞せん。

これも、法会の論議における問者表白が持ち込まれたものであらう。

内容については、頼長が『周易』の講師であつた時に、法相宗で説かれる如来三身説を喩えに用いて解説したことがある。

…、説経するに、周易を以て如来の三身に當つゝ虚無道を以て受用身に當て、伏羲・文王・孔子等を以て變化身に當つゝ（中略）…、衆人耳を傾く。如来三身の功德ならん。兼日權少僧都覺晴〔法相〕に仰せて抄出せしめ、之を見ゆ〔唯識論第十を抄す〕。

（天養元年十月二十三日条）

まさに、經史を説く方便として仏教の學説を援用しているのであり、「儒學の研究のために仏教の研究方法を利用しようとした」という評価に相応しい講書の性格の一端を示しているよう。

しかし、その一面で傍線部のように、自らの講義に人々が耳を傾けたことについて「如来三身の功德」と言っていることも見逃してはならない。実は、この講義に頼長は万全の自信を持って臨んだものではなかった。記事は以下のように続く。

鶏鳴の後、事了りて分散す。両問者の祿例の如し。余、之無

し。周易、今日始めて之を講ず。成佐は去んぬる比城外にて、候ふこと難く、定安・友業等、各易道を知らざるに依り、固

辞す。再三催すことを加ふと雖も、敢へて命を受けず。恒例の事なれば、黙止すべくにも非ず、仍て、余慙に之を講ず。偏に是れ事を闕かざるの爲なり。当時・向後の嘲りを忘るなり。冥加の爲に七所〔賀茂上下・吉田・六角堂・祇園・清水

寺・法成寺・行願寺〕に誦誦し、覺仁闍梨に仰せて、今朝より文殊念珠を修せしむ。

『周易』を講義した経験が無かつた頼長は、他の参加者に講師を依頼しようとしたが叶わず、しかし、恒例の事であるので闕くわけにもいかず、やむを得ず当代・後世の嘲りも忘れて自ら講師を勤めることにした。そのため、賀茂や吉田など七個所の寺社に布施をし、さらに当日の朝からは親しい僧侶に文殊念珠を行わせて加護を祈願している。儒學の講書の成功を仏に祈願することは異様とも見えるが、頼長の意識の上では、仏教が儒學と両立するだけでなく、積極的にそれを支えうる存在であつたことをここでは確認しておきたい。

三

頼長自邸講書は、後述する柿本人麿影供研究の中で言及されることがある。周知の通り、人麿影供は元永元年（一一一八）六月十六日に藤原顕季邸で行われたものを初度とし、頼長自邸講書に先立つものであるが、形式として積奠、それも当時の記録に散見

される個人の私邸で行われた私的な積奠を模倣したものとされ、その私的な積奠の例として時代は遅れるが、頼長の講書が挙げられることがあるのである。

そのことを念頭におきつつ、次に講書と積奠との関係について検討してみよう。

積奠とは、大学寮において毎年春（二月）と秋（八月）上丁の日の二回行われる、孔子及びその弟子を祭る行事を言う。『江家次第』等から行事の概要を示すと次のようになる。

- ① 廟堂院内の孔子・顔回及び孔門九哲の画像に奉幣
- ② 画像の前に木の実・飯等を供える〔饋享〕

「大学寮関係者のみ参加

- ③ 孔子と顔回影に初献し、祝文を読む〔拝廟〕

- ④ 寮庁にて三献・饗応〔寮饗〕

- ⑤ 都堂院にて経書の講論・論議〔講論〕

- ⑥ 酒饌を賜った後、詩を作り、座を改めて披講

〔百度座・宴座・隠座〕

- ⑦ 翌日、紫宸殿にて論議

〔内論議・但し秋の積奠の場合。長元には廃絶〕

まず、廟堂にまつられている孔子らの画像に幣や食べ物などを供え、祝文を読んだ後、都堂院において経書の講論があり、詩宴が行われるというのがそのあらましである。

頼長の自邸講書は、大学寮で行われるこの行事を自邸に持ち込んだものだというのである。確かに、両者の類似点は少なくない。

まず挙げられるのは、孔子らの画像の存在と、それに対する拝礼・供物であろう。頼長の講書でも画像が懸けられ、拝礼、供物そして祝文の読誦^⑨が行われている。画像を懸けるものの、臨時の講義であったので膳を供えず、拝礼も行わない例（康治三年二月二十一日条）や、服日であったために影を卷いたまま懸けている例（久安三年十月十日条、久安六年七月二十六日条、同年八月二十一日条）などがあり、たとえ巻かれたままであっても画像にはそこに存在する意義があったこと、そして、拝礼や供物には行事の威儀を整える働きがあったことが認められる。

また、先に挙げた康治二年七月二十二日条の波線部には「一事を問ふことを請ふ。積奠並びに同内論議皆一事、仍て是又一事を問ふ」とあり、「拝無し、積奠の例に依るなり」（久安三年四月七日条）など積奠の例に倣ったことが明言されていることもある。加えて、頼長が積奠に強い関心を抱き、積奠晴儀の復興^⑩を行ったことも、自邸講書の開催と結びつけられてきた。

久安四年以前に大学別当に就任していた頼長は、仁平三年（一一五三）八月、長年行われてきた、簡略化された雨儀に代わり、より複雑な次第である晴儀による積奠を復活させる。

積奠次第四卷（広二卷・略一卷）・指図七枚、今日作り了ぬ。礼服は私領を分配して之を調ふ、…

（仁平三年七月八日条）

大学寮に参り、積奠の礼（晴儀）を習ふ。恒例は習礼無し。而るに晴儀久しく絶えて行はれず、之を知る者無し、仍て余

新造の外記に給へるの次第、官に給へるの指図に任せて、其の礼を習はしむ、

(仁平三年七月二十六日条)

これらによれば、久しく絶え、知るものもなかった積奠晴儀の次第、指図までも自ら作り、実際に大学寮で予行演習を行うなど、彼が積奠に深い造詣を持ち、その旧儀復興に並々ならぬ熱意を持っていたことは疑われない。しかし、それらがただちに自邸に大学寮の公的行事を持ち込み、私的に行うことにまでつながると考えて良いのだろうか。今暫く検討を加えてみたい。

積奠は移動の多い儀式である。前述の通り、積奠は、雨儀では廟堂の孔子らの画像を拝礼した後、寮庁で饗宴を行い、都堂院に移動してそこで講論以下を行う。晴儀では、都堂院で講論の後、大学寮庁に移動して饗宴を行い、さらに再び都堂院に戻って百度座、宴座、隱座を行う。どちらにしても拝礼が行われる廟堂と、講論が行われる都堂院は分けられている。参加者にもそれは意識されていたようで、例えば積奠の折に作られた詩序には、

既にして祠官の奠既に畢り、講肆の筵旁た開く…、

〔本朝文粹〕卷一一「仲春積奠。聴講毛詩。同賦「鶴鳴九臯」詩序」藤原雅材

舎菜の礼漸く畢り、函丈の儀初めて開くに迄び、彼の淳海の儒に命じて此の隸古の典を講ぜしむ…、

〔本朝統文粹〕卷八「仲春積奠。聴講古文尚書。同賦「政在養民」詩序」藤原敦宗

といった文言がしばしば見出される。拝礼・供物の礼が「畢」り、講論が始まるのだ、という両者を切り離してとらえる言い方の前提には、廟堂から都堂院への座の移動があろう。積奠の講論や作文が行われる場に孔子の画像は存在していない。そのためか、積奠詩に廟堂の孔子画像が登場することもない。

これに対し、頼長の講書は、その全てが同一の室内で行われる。重要なのは、それが孔子画像の前（影前）であるということである。⑩^⑪。康治二年七月二十一日の初度の講書で作られた詩の題は、「孟秋、文宣王の影前に陪し左伝を聴講す一首」というものであった。また、唯一現存する、講書における頼長の詩は次のようなものである。

仲秋文宣王の影前に陪し、儀礼を講じ畢んぬ。同しく「礼儀序有り」といふことを賦す一首、

内大臣正二位藤原朝臣頼長

上賤下尊今礼篇

上は賤し下は尊び 今篇を礼す

威儀有序本三千

威儀に序有り 本三千

少年筮日既終後

「少年」の筮日既に終へたる後

大射張酬未先行

「大射」の旅酬未だ行はざる先

主客昇降全不失

主客は昇降して全く失せず

君臣面位敢無愆

君臣は面位して敢へて愆ち無し

庸才講匠迷攸答

庸才の講匠は答ふる攸に迷ひ

執卷慙陪聖影前

〔有注〕

卷を執りて慙に聖影の前に陪す

〔有注〕

(久安三年八月二十九日条)

孔子の影前という作詩の状況は詩題に必ず盛り込まれるべきものであった。また、「礼儀有序」第八句には、注が付されていたとあるが、ここでもおそらくは聖影の説明、あるいは聖影の前に自分のような非才の者が侍っていることについての恐縮の思いが述べられていたに違いない。いずれにおいても、この行事において孔子の影前ということが強く意識されていたことが分かる。「礼記一部、文宣王の御前に置く、後之を效^{なま}ふべし」や「詩三首へ俊通進めず、四首は憚り有る故なり」、献すること例の如し」(ともに康治二年十二月十八日条)といった記述によれば、孔子影の前には供物に加えてその日読まれるテキストが置かれ、その場で作られた詩は孔子に献納されていたと思しい。孔子は頼長らとともに講書・作文に参加する存在としてその場に在った。

頼長自邸講書がある程度積奠の講論の作法を真似たことは確かであろう。しかし、孔子画像の有無という点で、頼長邸講書と積奠の講論とは場の性格、そしてその当然の結果として、そこで生み出される詩の性格を大きく異にすることとなった。頼長邸講書を自邸に持ち込まれた積奠とする理解は適切とはいえない難いのではないだろうか。

四

頼長自身はこの行事を「庚子講」あるいは「孔子講」と呼び、その次第を記した文章を「庚子講式」と名付けていた。

…、次に例に依りて論語を講ず、…(中略)…、件の式は前少納言源朝臣俊通、作りて之を献ず(庚子講式と名づく)。予が命に依るなり。礼儀具さに式に見ゆ、委記すること能はず(前々式無し、今度始めて用ゐる)。

(天養元年十二月二十四日条)
世間の穢に依り、恒例の孔子講停止す。

(天養二年八月二十七日条)
次に例に依りて、明年の庚子・庚申講の講師・問者及び詩題を定む、庚申は詩題無し。

(久安四年八月二十一日条)
ここから想起されるのは、寺院における「講」——本来は寺院において経論を講説する法会(講会)を意味し、後には仏菩薩や祖師高僧などを本尊として礼拝の対象として、その徳をたたえる集会を指した語であり、また、その儀式の次第を記した文章である「講式」であろう。

このことと関わって参考となると思われるのが、やや時代は降るが、鎌倉時代中期に成立した『普通唱導集』に、高僧・祖師に続いて白樂天影、柿本人麿影、老子影らとともに孔子と顔回の影についての唱導が収載されていることである。孔子、顔回以外の顔ぶれについては、画像が描かれ、その影前で礼拝儀式が行われたことが共通している。人麿影供については言うまでもないが、老子も庚申侍の夜に画像が懸けられた例があり、白樂天も人麿には遅れるが影供の行われた形跡がある。人麿影供について後に

「柿本講式」が書かれたことを思えば、これらの行事も一種の「講」と捉えられていたと言えよう。

ならば、孔子と顔回についても同様に、高僧・祖師に準じて彼らの画像を本尊とする行事、すなわち「講」が行われた可能性は大いにある。『朝野群載』巻二一の「永久二年（一一一四）十二月、江安子故国亭に於いて、孔子影を奠す。仍て為康祝文を作す」と注記された祝文や、これも鎌倉時代の例となるが、『王澤不竭抄』に挙げられた詩題の例の中に、「秋夜仲尼の影前に陪し、孝経を講じ竟んぬ。各「曾子詩坐」といふことを詠ず（各一字を分く。探りて才の字を得たり）」とあることは、頼長自邸講書以外にも類似した行事が行われた証左となると思われる。

儒学の祖たる孔子を本尊に、という突飛な発想のように思われるが、孔子が儒童菩薩、顔回が迦葉菩薩の垂迹であるという説は八世紀にはすでに知られていたし、当時の孔子崇拜は次第に現世利益的傾向を強めており、学問の成就や昇進を祈る対象として孔子は半ば神格化された存在であった。頼長も養女の入内や夫人の名前の決定、身近な儒者の昇進を祈願する折などには、石清水や春日といった有力な神社と並んで「先聖先師」すなわち、大学寮廟堂の孔子と顔回影に参拝し、奉幣を行うこともあり、神格化した祈願の対象として捉えていたと考えられる。

こうしたことを考え合わせるならば、頼長の自邸講書は、「孔子講」という頼長自身の呼び方を素直に受け止めて、孔子を本尊とする講と理解すべきなのであろう。釈奠の影響が皆無とは言え

ないし、経史の修学が最終的な目的であったことは疑われないが、その底辺には、仏教の祖師的存在である孔子への尊崇があり、ならばこそ、講書の作法を僧侶に学ぶことも、その成功を仏に祈願することも、何の矛盾も感ぜられることなく行われたのである。

五

前節では、影前における行事として頼長の自邸講書を捉え、釈奠との質的な相違を指摘した。これにより派生する問題は小さくはない。前述したように、柿本人麿影供研究において、釈奠はその先蹤の第一として挙げられてきた。人麿影供の研究の端緒を開いた山田昭全氏は、

まず画像を掲げるといふ点が人麿影供に似ている。ただ釈奠の場合は孔子一人だけではない。その影前に魚鳥の供物をそなえる点も共通している。さらに題詠の詩に対して人麿影供では題詠の和歌になっていること、道々の輩が論議を行なうに対してこちらは人麿の讃を講ずることなど共通点が多い。

と述べられ、それを承けて近年佐々木孝浩氏は公的行事である釈奠と私邸での歌会である人麿影供との間に、頼長自邸講書を含む「当時私的に催されていた釈奠」の存在を挙げておられる。鎌倉時代後期頃に成立したとされる藤原定家仮託の歌学書『愚秘抄』の、

凡人丸供の規式は、釈奠の影供のやうにたがはぬこと也。二

月八月兩度上の丁日、大学寮にして積奠のまつりあり。これ孔子の影供也。儒者各詩を作て講ずる也。文武天皇の御宇に始て行なはれたりき。

という一節がそうした見解に決定的な影響を与えたと考えられるが、これは雑駁な説明から見ても、およそ積奠の次第に精通した人物によるものとは思われない。歌人に対して、人麿影供とは積奠の影供（拝廟を指すのであろう）と違わず、積奠とは孔子の影供のようなものだと言明しているこの記述をもって、影供が積奠の影響下に考案されたとはいささか論の飛躍であらう。

さきに挙げた人麿影供の先行研究では積奠の次第について詳細な検討が行われているものの、積奠における講論が孔子の影前で
は行われていないこと、積奠における詩や詩序において孔子影の存在感が希薄であることについては全く触れられていない。影供という、影前で行われることに最大の特色と意義を持ち、中世には濃厚な仏教色をあらわにしてゆく儀式の先蹤として、積奠はそれほど適切なものであろうか。疑問を感じずにはおれないのである。

さて、画像の前で行われる行事という観点で同時代を眺めてみると、いくつかの例を挙げることが出来る。

北野作文⁽¹⁹⁾

天神菅原道真を祀った北野天満宮で作文が行われたことが知られる最初は、寛和二年（九八六）の慶滋保胤の「養菅丞相廟願文」〔「本朝文粹」巻一三〕であるが、平安時代後期以降、その例

は増加している。頼長と同時代の催行では、藤原実行（大治三年（一一二八）『中右記目録』『擲金抄』、長承二年（一一三三）『中右記』）但し、延引される）、源師頼（長承二年『中右記』『長秋記』）らの例があり、頼長自身も、天養二年三月六日によれば、近臣藤原孝能の夢想により、北野作文を計画している。催行時不明の詩も、詩題に「北野」や「陪聖廟」と記することにより北野作文の折の作と判明するものがある。北野廟には道真の像がまつられていたと考えられ、これも影前という場に大きな意味がある作文であったと言えよう。

白楽天影供

『本朝統文粹』巻一二に藤原敦光による「白居易祭文」があり、「後素之功、新以凶像」と述べることから、白居易の画像が描かれ、それをまつる行事が行われたことが分かる。また、時代は降るが、陽明文庫蔵「猪隈関白記紙背詩懷紙」⁽²⁰⁾には、白居易の影前で詠まれたと思しい詩が数編残されている。二例を挙げる。

：

唯非万歳千秋契

唯だ万歳の千秋を契るには非ず

詩席座前拝楽天〈有注〉

詩席の座の前に楽天を拝す〈有注〉

（秋夜同賦対月契千秋各分一字応教詩〈探得年字〉）平時宗

：

羽林亭裏歡遊席

羽林の亭裏歡遊の席

今拝楽天呈一章〈新奉懸楽天影、披講此詩。故献此句〉

今楽天を拝し一章を呈す

〈新たに楽天の影を懸け奉り、此の詩を披講す。故に此の句を献ず〉

〔秋夜同賦対月契千秋各分一字応教詩〈探得章字〉〕平親輔〕
また、源通親は鳥羽の草堂において白居易の画像を懸けて法会と詩会を行っている。

このほか、庚申の徹宵行事の際に孔子や老子の画像を懸ける例が見られるのも院政期に入ってからのものである。

初度の人麿影供以降様々に発展していく和歌の影供をここに加え、院政期から鎌倉時代にかけて同時多発的に現れてくるこれらを、「影前」という特殊な場を舞台とする文学制作、「影前の文学」という一つのまとまりとして想定出来るのではないか。

頼長自邸講書は、儒学経書の講書という点では確かに主催者頼長の時代としては特異な個性が発揮された行事であろう。しかし、文学制作の場として「影前の文学」の一端に位置するものでもあった。頼長の儒学振興への熱意や合理主義はとかく時代から突出したもののように言われることが多いが、それを強調しすぎるにより行事の本質が見据えにくくなることもあろう。

おわりに

以上、藤原頼長が自邸で行った講書について、釈奠との比較を中心にその性格を検討し、従来私的釈奠と目されてきた行事ではあったが、画像の置かれた場とその意味からすれば、釈奠との関係は希薄であり、むしろ孔子を本尊とする講と見るべきことを指

摘した。そして、孔子の影前という講書の行われた場に注目することは、当該期に特徴的な文学制作の場として「影前」という場を想定することにつながった。

しかし、なおこの行事には不明瞭な点が多い。頼長がこうした孔子講書を発想した背景、目的は何か。私邸における講書には、祖先である基経、道長らの例があり、頼長の兄忠通も『史記』を読み、作文を行ったことが知られるが、そうした類例と頼長の自邸講書とはどのように関わるのか。法会や肖像画の歴史的展開をも視野に収めつつ考究を続けたい。

【付】本稿は、平成十七年度大阪大学国語国文学会（平成十七年一月八日 於大阪大学中之島センター）における口頭発表「藤原頼長自邸講書考」にもとづくものであり、日本学術振興会研究奨励金および科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による成果の一部である。

注

- (1) 以下書名を省略する。引用は保延二年十月から康治二年十二月までは史料纂集本、康治三年（天養元年）以降は史料大成本に拠り、私に訓読を施した。へゝ内は割注。
- (2) 康治二年七月十三日条、同年十二月三十日条、天養元年十二月三十日条など。
- (3) 小島小五郎『公家文化の研究』（育芳社・一九三九）、和田英松『藤原頼長の因明研究』（『国史説苑』明治書院・一九三九、初出

『仏教史学』第三編第八号・一九一三)、橋本義彦『藤原頼長』(吉川弘文館・一九六五)、和島芳男『中世の儒学』(吉川弘文館・一九六五)など。

- (4) この他、久安二年八月二十一日に行われた孔子生誕日の講書について、興福寺の維摩会と酷似することが指摘されている。高山有紀『中世興福寺維摩会の研究』(勉誠社・一九九七)参照。

- (5) 前掲注(3) 和田論考。

- (6) 家永三郎『上代倭絵全史』(高桐書店・一九四六)を受けて片野達郎『人麿影供』の変遷と和歌史的意義』(『日本文学と絵画の相关性』初出『東北大学教養学部紀要 人文科学篇』(国文学・漢文学特輯)第四号・一九六六・二)が『台記』に見える孔子像を「釈奠図像」としているほか、『日本漢学年表』(斯文会編・大修館・一九七七)は「講論」と「釈奠」の語を混用する。最近では翠川文子『釈奠(一)―前期釈奠年表―』(『川村短期大学研究紀要』第一〇号・一九九〇)にも挙げられている。また、佐々木孝浩『六条顯季邸初度人麿影供歌会考』(『国文学研究資料館紀要』第二号・一九九五)は私的な釈奠の例として源俊房の『水左記』の、毎庚申に「先聖を奠」という記事と頼長自邸講書を挙げる。

- (7) 釈奠については、倉林正次『饗宴の研究 歳時・索引編』(桜楓社・一九八七)、弥永貞三『古代の釈奠について』(『古代の政治と史料』高科書店・一九八八)、緑川文子『釈奠(一)』(『川村短期大学研究紀要』第一〇号・第一八号・一九九〇・一九九八)の諸編に拠った。

- (8) 前掲注(6) 佐々木論考に示されたものに、二、三の補足を加えた。

- (9) 第二回の講書である康治二年八月十六日条には「始め成佐祝を讀まざるも、今度友業大祝の文を読む」とあり、以後も「講師祝

を讀みて了んぬ」(久安三年四月七日条)などと見える。

- (10) 頼長の大学寮に関する事績については、戸川点『院政期の大学寮と学問状況―藤原頼長の事績を中心に―』(服藤早苗編『叢書・文化学』の越境4 王朝の権力と表象)森話社・一九九八)参照。

- (11) この後、安元三年(一一七七)四月二十八日の大火で大学寮は全焼、孔子像は奇跡的に難を逃れ、像などを収めるための廟倉は再建されたが、大学寮が再建されることはなく、この年以降釈奠は太政庁で行われることとなる。しかし、その時も廟拝は太政庁の正庁で、講論は太政官庁の西庁で行われ、座は改められているこのことについては『玉葉』安元三年七月十八日条・同二十八日条・寿永二年二月二日条などに詳しい。また、太政官庁釈奠の復元を試みる翠川文子『釈奠(四)』(『川村短期大学研究紀要』第一三・一八号・一九九三・一九九八)参照。

- (12) 以下、画像の前という場の持つ問題については、『朝日百科日本の国宝別冊 国宝と歴史の旅』(朝日新聞社・一九九九・二〇〇〇)に連載された太田昌子・大西廣『絵の居場所』、特に連載第三回「巨大掛幅は「会」のメディア―涅槃図」(『国宝と歴史の旅3 神護寺薬師如来像の世界』朝日新聞社・一九九九)から示唆を受けた。

- (13) 文意より「張」を「旅」に改めた。

- (14) ただし、『朝野群載』には「江安子故国亭釈奠祝文」という題で収められており、その性格等についてはなお検討の必要がある。
- (15) 追塩千尋『古代・中世日本の孔子像に関する覚書』(『史料と研究』第二五号・一九九六)参照。

- (16) 「柿本人麿影供の成立と展開―仏教と文学との接触に視点を置いて―」(『大正大学研究紀要』第五一輯・一九六六)。この他、前掲注(6) 片野論考も、同様に釈奠の行事形式を人麿影供が踏

襲しているとし(但し、「影前で行われる講書・論議」という理解がなされている)、一方で「肖像画の系譜の上からさかのぼることのできる「人麿影供」の源流」の第一に「密教における祖師像や師像の礼拝供養」を挙げ、第二に釈奠を挙げる。

(17) 前掲注(6) 論考。

(18) 川平ひとし「文台と本尊のある場—和歌会次第書類点綴—」『中世和歌論』笠間書院・二〇〇三、初出『中世文学』第三八号・一九九三、佐々木孝浩「歌会に人麿影を掛けること」『文学』第六卷第四号・二〇〇五 参照。

(19) 後藤昭雄「北野作文考」『平安朝漢文文献の研究』吉川弘文館・一九九三、初出『語文』第五六輯・一九九一 参照。

(20) 真壁俊信「天神画像の発生」『天神信仰の基礎的研究』近藤出版社・一九八四、松原茂「天神信仰の流布と天神画像の展開」『古筆叢林1 古筆と国文学』八木書店・一九八七、福島恒徳「天神と渡唐天神—天神信仰と天神像の諸相—」『禪と天神』吉川弘文館・二〇〇〇 など参照。また、『明月記』嘉禄元年(一二二五)三月四日条には、大賞会や釈奠等の用具を収める蘭林坊に強盗が入った際、「天神御影」も被害を受けたとあり、道真像は大学寮にも所蔵されていた可能性がある。

(21) 『和漢比較文学叢書』中世文学と漢文学(汲古書院・一九八七) 収載の翻刻に拠った。

(22) 拙稿「源通親「擬香山模草堂記」新考」『白居易研究年報』第四号・二〇〇三 参照。

(23) このことについては、「平安時代後期における庚申信仰について」と題した口頭発表を行った(国際シンポジウム「道教と日本文化」、二〇〇四年十一月)。近日成稿して発表する予定である。

(24) 『菅家文章』巻二・一四六「相国東廊、講孝経畢。各分一字、得忠順弗失而事其上」、同一四九「相府文亭、始読世説新書。聊

命春酒、同賦「雨洗杏壇花」。応教一首、『左経記』長元八年五月三日条など。

(25) 『御堂関白記』寛弘四年五月三十日条など。

(26) 『法性寺関白御集』に「読史記賦秦本紀」以下四首が残る。拙稿「藤原忠通「読新楽府詩群」考」『和漢比較文学』第二四号・二〇〇〇 参照。

— 日本学術振興会特別研究員 —